

# オニオコゼの種苗生産と放流技術の開発

(特定海域新魚種定着促進技術開発事業)

清川智之

## 1. 研究目的

オニオコゼの種苗生産の安定化と効果的な放流技術の開発を行い、本種の栽培化の可能性を検討する。なお、詳細については「特定海域新魚種定着促進技術開発事業報告書（平成10年度）」に報告した。

## 2. 研究方法

### (1) 種苗量産技術開発

親魚の餌料を改善し、採卵状況が改善されるか検討した。また、ワムシ給餌期間の延長、飼育水温の管理による初期生残率の変化を検討した。

### (2) 中間育成技術開発

これまで実施した滑走細菌症の防除方法の再現性を確認し、飼育方法の改善による育成期間の短縮化や生産コストの削減方法を検討した。

### (3) 資源生態調査

大社湾で桁びき網による幼稚仔採集調査を行い、適正放流地点解明に関する知見を収集した。

### (4) 放流技術開発

大社湾で当歳魚放流を行い、放流魚の漁獲物への混獲状況から天然資源への加入状況を把握した。さらに放流・天然魚の生物測定結果から、本種の年齢・成長・成熟過程等を推定した。

## 3. 研究結果

### (1) 種苗量産技術開発

浮上卵が安定して得られていなかったため、親魚に与える餌料を改善（活サルエビ、アスタキサンチン、総合ビタミン剤等を給餌）し、採卵状況の改善を試みたが、良好な結果は得られなかった。また、ワムシの給餌期間の延長、水温管理（24～25℃）により、生産回次によっては浮遊期の平均歩留が約30%と比較的高くなった。

### (2) 中間育成技術開発

低密度直飼いで飼育による中間育成期間の短縮および低コスト生産を目指した結果、11月下旬には5cm以上に成長し、カゴ飼育よりも良好な成長を示した。

### (3) 資源生態調査

過去の調査により、オニオコゼ仔魚は沿岸域の水深30～40mに分布することが明らかとなっていたが、平成9～10年度の調査により幼魚～成魚が沿岸砂浜域の水深20～30mに分布することが明らかとなった。着底直後の稚魚については採集できなかった。

### (4) 放流技術開発

従来は1歳魚の放流を行ってきたが、今年度は大社湾（簸川郡大社町御碕地区）においてALC標識を施した当歳魚（全長54.2mm）を放流した。多伎・浦郷・大社の3ヶ所において標本調査を行った結果、放流魚の混獲率は多伎14%、浦郷15%、大社1%であった。浦郷は平成7年のみの放流であることから、放流魚が昨年よりも成長しているのが確認された。また、多伎の近隣の大社では放流魚がほとんど混獲されず、放流魚の定着性は高いと推察された。